

図書館資料の除却・廃棄について

信州大学附属図書館医学部図書館 岩井雅史

1.なぜ除却をおこなうか

図書館資料の除却・廃棄は、図書館の蔵書構築において、主要なプロセスの 1 つである。除却の目的は大きく言って 2 つある。

1 つは、古くなった資料を新しい資料に更新して、蔵書の鮮度、ひいてはコレクションの価値を維持することである。ここで言う「古くなった」とは、現在の学問的知見や利用者のニーズにそぐわなくなるという内容の陳腐化と、物理的に損傷・摩耗して使用に耐えなくなることとの、両方を含んでいる。利用者に対して正しく価値のある資料を提供するという意味で、昔も今も変わらず重要な目的である。

もう 1 つは、除却することによって空いた空間を、新たに求められている別のサービスに転用することで、利用者サービスの向上につなげることである。大学図書館においては特に近年、ラーニング・コモンズと呼ばれる能動的学修のための空間の整備が求められている。従来の閲覧室に比べ、より多くのスペースを必要とするため、これまでであった書架を撤去して整備するという事例も少なくない。

信州大学医学部図書館の事例で言えば、研究室からの返戻資料が多数ある中での書架のやりくりという日常的な問題、ラーニング・コモンズ以前の学生用の学修スペースの不足という教育上の要請、さらには工事で一部書庫が使えないといった突発的な理由などが重なって、ここ数年で除却が大きくクローズアップされてきた。

2.何を除却するのか

何を除却するかを選択するにあたっては、個人の主観は極力排除せねばならない。過去には、公共図書館の職員が個人の独断で行った蔵書廃棄について、違法性を認定したうえで著者からの損害賠償請求を認めた事案もある。図書館の蔵書は公的財産であり、それを廃棄するにあたっては、説明責任が求められる。そのためには、除却の基準を明文化して、それに従って除却するのが適切な方法である。

明文化された廃棄基準の整備状況はさまざまである。学校図書館では、学校図書館協議会においてガイドライン的な基準が示されている一方で、公共図書館や大学図書館では、多くの場合各館が独自に定めている。

信州大学では 6 つの図書館があるが、共通の基準として「除却及び処分に関する要領」と「『図書館資料の除却及び処分に関する要領』申し合わせ」を定めている。前者においては、除却が可能となる基準を定め、後者においては、その基準に該当するかどうかを判断するための指標を示している。

ただし、実運用においてはこれだけでは十分でなく、各指標がどの水準に達すれば基準

に該当したと言えるかを定めなければならない。この点は、資料の主題分野などによって異なる部分であり、全学一律で定めるのではなく、学部図書館ごとに定めるのが適当との考えのもと、各館による裁量も盛り込んだ、より具体的な要領を検討中である。

3.除却する資料の代替・補完

空間を作るための除却の場合、何もしなければ、利用可能な資料の単純な減少となる。これに対しては、除却した資料の代替となるものを用意することで、サービスの低下を補い（あるいはむしろ向上させ）、利用者や図書館設置母体の理解も得やすい。

3.1 ILL

伝統的な手段としては ILL がある。他の機関が将来的にも所蔵を続けられると思われる資料については自館では廃棄して、必要になったら ILL を依頼するという形態である。先に挙げた信州大学の運用にも、この考え方が盛り込まれている。

主に大学図書館が参加している NACSIS-ILL の統計では、近年の電子ジャーナルの普及にともなって、件数の減少傾向が続いている。洋雑誌の複写の減少が特に顕著だが、和雑誌も J-STAGE などのプラットフォームのゆるやかな浸透や、機関リポジトリを通した大学紀要等の電子的公開の増加を受けて、遅れてではあるが減少傾向に移行している。

しかし、電子ジャーナルの価格高騰に対して、いよいよ大学図書館側も限界を迎えており、電子ジャーナルの包括契約から離脱する大学が出始めている。この動きが進行すると、ILL への需要が再び高まる可能性も見える。

3.2 電子媒体への移行

その電子ジャーナルをはじめとした電子媒体への移行というのも、冊子を減らして空間を作るという目的では、有力な方法である。

電子ジャーナルを購読すれば、一見冊子は必要なくなるように思えるが、契約内容はよく確認する必要がある。購読を止めると一切アクセスできなくなるという契約だと、冊子のように資料が手元に残らない分、バックナンバーの閲覧に不都合が生じる。また、構成員（大学ならば学生や教職員）以外の利用や、ILL による他機関への提供が認められているかどうか、認められていないとしたらそれでもよいかどうか等の点も検討が必要である。

また、電子ジャーナルは冊子のように 1 冊単位でパラパラとブラウジングするということが難しいという特性がある。それを補い可視性を高める意味では、単に電子ジャーナルにアクセスできるというだけでなく、利用者がたどり着くための動線の整備も重要である。電子ジャーナルリストの公開、OPAC の雑誌所蔵情報からのリンク、文献データベースからのリンクをサポートするリンクリゾルバの導入などの方法がある。

そしてもっとも重要な点として、電子ジャーナルは基本的に 1 年毎の契約となり、しかも毎年値上がりするということに留意する必要がある。将来の図書館経営を圧迫する恐れもあり、計画的な導入や機関内での調整が必要といえる。

なお、電子ジャーナルには、これから出る号を継続して契約するカレント契約とは別に、バックナンバーを一括で購入するバックファイルと呼ばれるものも存在する。こちらは基本的に買い切りで、維持費がかかったとしてもカレント契約に比べると少額なので、冊子のバックナンバーをまとめて処分したい場合などに有効である。ただしバックファイルは、欠号があったり古い号はスキャンが不鮮明だったりというリスクにも留意が必要である。

電子媒体には、ジャーナル＝雑誌だけでなく、ブック＝図書もちろんある。しかし電子ブックは、個人向けとしては Amazon Kindle をはじめとした数々のサービスが登場しているが、図書館向け市場では、日本語コンテンツやプラットフォームはまだ発展途上であり、当面は代替としての選択肢にはなり得ないのが現状である。

また、こうした電子ジャーナルや電子ブックといった商用サービスとは別に、インターネット上には数多くのコンテンツが公開されている。具体例としては、国立国会図書館の電子化資料や、機関リポジトリを通じて公開される各大学による紀要等が挙げられる。これらの資料は、代替としての候補にはなり得るが、運営主体がどのような機関で、十分な永続性の保証があるかどうかには、注意すべきである。

除却対象の紙資料から電子化するといったことも可能性だけなら考えられるが、著作権処理等の労力を考えると、館単位ではあまり現実的ではない。電子化そのものは、貴重書や郷土資料等について、保存と利用を両立させる観点から検討に値する手段であるが、除却・廃棄とはまた別の文脈であろう。

3.3 共同保存／シェアード・プリント

補完手段の最後として、複数の館による共同保存と、そこから派生したと考えられる「シェアード・プリント」と呼ばれる事業について述べる。保存場所としての書庫を複数の機関で共用するという「共同保存」の取り組みは、北米では 1940 年代から各地域行われており、他の諸外国でも多くの事例がある。わが国では、国立大学図書館協議会（現・国立大学図書館協会）によるものや NPO 法人共同保存図書館・多摩によるものなど、検討や提案は複数行われているが、実践例の報告は今のところ見られない。

この共同保存の考え方を派生・発展させたものと考えられるのが、シェアード・プリントである。シェアード・プリントについては、大学図書館も含めた学術情報基盤の整備についての文部科学省の審議会における「審議まとめ」でも言及されており、2014 年には、お茶の水女子大学・千葉大学・横浜国立大学が、わが国で初めてシェアード・プリントに着手することを発表している。

共同保存とシェアード・プリントとの違いはいろいろな説明があるが、もっとも大きな相違点は、ガバナンスと所有権の点であろう。すなわち、共同保存は単に保存場所を共用するだけであり、保存される資料はそれぞれの参加館が選択し、資料の所有権も元の館が保持したままである。これに対してシェアード・プリントの場合は、まずどの資料を保存するかについて、重複等を考慮しながら、参加館の間での調整が行われる。また、資料の所有権も、参加館でコンソーシアム等を組んで、そこへ移管することが多い。いわば、こ

れまで館単位で構築してきた「蔵書」を、複数の館で共同して構築するという考え方といえる。保存施設を別に作らず、保存・管理の分担を決めたうえで、引き続き参加館自身の施設で保管するという分散型の形態もある（上記の国立3大学の事例もその形である）。

この事業の効果としては、重複の抑制を複数館が共同で行うことによる効率化、保存コストの分散、利用可能な資料の拡大、各図書館での空間の有効活用などが挙げられる。ただし従来になかった考え方に基づいた事業であり、事例の蓄積も少ないことから、導入にあたっては参加館の間で十分に理解を深め、諸事項を検討しておく必要がある。

4.除却にあたっての課題

信州大学医学部図書館における除却の課題としては、3点あると考えている。

1点目はルーチンワークへの組み込みが出来ていない点である。書庫の移転の際の冊子のバックナンバーや、研究室からの返戻図書の処理までで手いっぱい、開架図書が手付かずの状態である。つまり除却を行っているとは言っても、冒頭に述べた除却の目的を実際に達成するところまで到達していない。開架図書の鮮度の低さについては、利用者からも苦情が寄せられることもあり、本来であれば開架で利用のない資料を書庫に送り、書庫で不要な資料は廃棄するというサイクルを回したい。新規受入図書が少ないため、これを進めると開架冊数が減ってしまうということにもなるが、実際の利用度を考えれば、開架冊数は少なくともよく、利用者用スペースをもっと確保すべきであるかもしれない。

2点目は除却対象に関する資料知識・主題知識の問題である。学部の図書館であるため、蔵書も専門の教科書や研究書が多くを占める。それらの主題について知識がないと、重複等でない限りは、この図書の内容は古いから廃棄してよい、ということ判断するのはかなり難しい。もちろん学部図書館に勤務する以上、その学部の専門主題知識を持つておくべきであることは言うまでもないが、総合大学の場合、人事異動で数年ごとに所属する館が変わる場合が多く、そのたびに専門知識を身につけることは、なかなか実現できていないのが実情である。これは図書館で選書を行う場合にも共通する課題であり、個々の図書館職員の努力とともに、人事や人材育成など経営上の工夫も必要であろう。

3点目は除却に対する意識の問題である。現役の学生が全く使用しないような本でも、研究者が思いもかけず探しに来るという経験は、大学では時折ある。そうしたこともあって、大学図書館は基本的に資料を残したがる場所である。重複ではない資料を廃棄することに、強いためらいを覚える図書館員は少なくない。それと廃棄の必要性との間で、どのようにバランスを取るかが悩ましい。選書基準や除却基準を明文化し、実質的に使えるものにすることは、そうした部分をサポートするためにこそ必要と言えるかもしれない。

図書館資料の除却・廃棄について

平成26年11月8日

信州大学附属図書館医学部図書館

岩井雅史

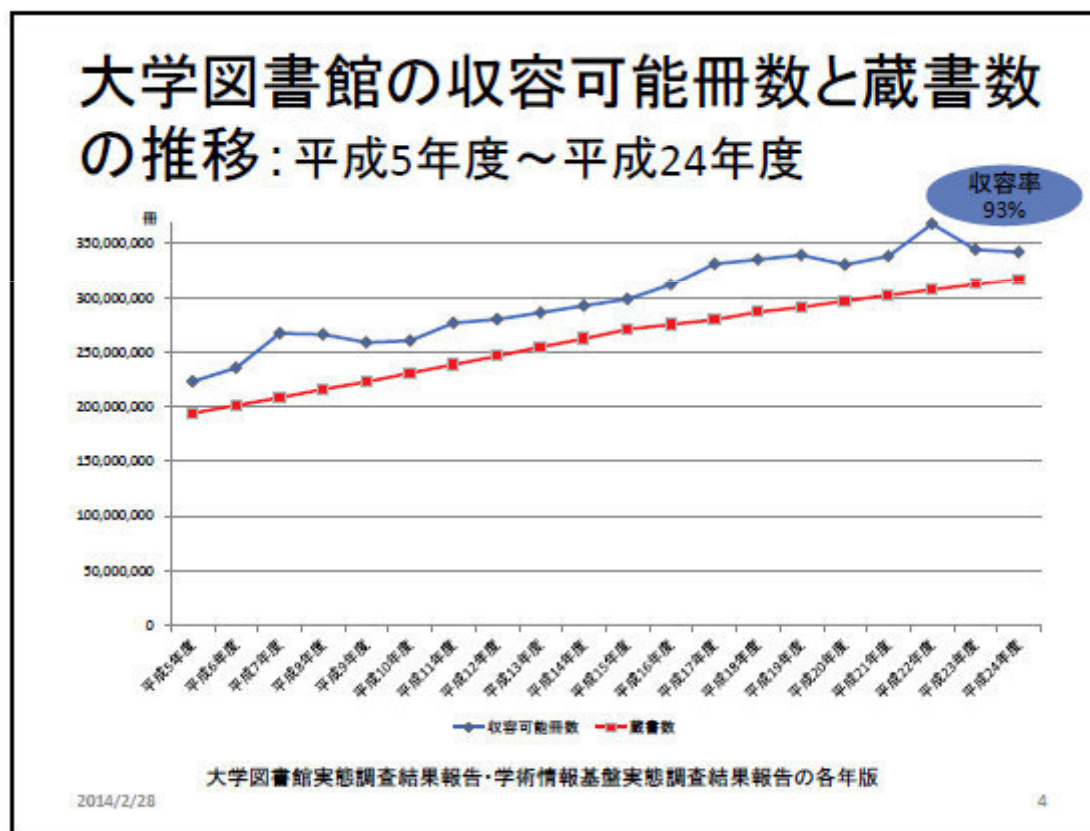
なぜ除却・廃棄を行うか

目的

- 古い・陳腐化した資料を、
新しい・重要性の高い資料に更新
⇒ コレクションの価値の維持
- 別のサービスのためのスペースを確保
⇒ 利用者サービスの向上


背景(1)

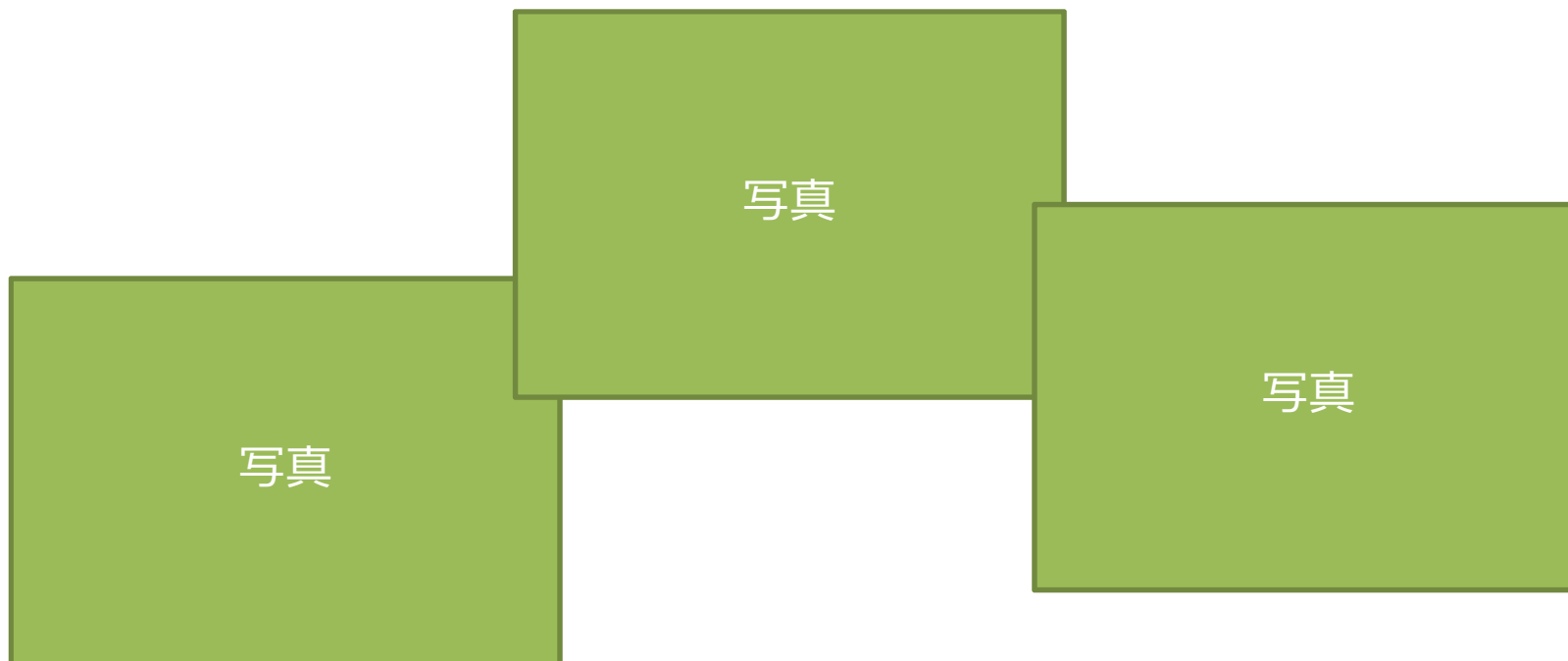
■ 書架の狭隘化



出典：加藤信哉. 日本：状況報告—共同保存図書館構想からシェアード・プリントへ. KEIO大学図書館国際フォーラム「大学図書館における冊子体コレクションの将来～日本版Shared Printの可能性」. 2014年2月.

背景(2)

- 学修スペース確保の要請 
(ラーニングコモンズ)



ラーニング・コモンズ

- “最近の大学においては、学生が自ら学ぶ学習の重要性が再認識され、その支援を行うことが大学図書館にも求められている。近年、整備が進められているラーニング・コモンズ、図書館職員等によるレファレンスサービスや学習支援は、このような要請に応える方策といえる。”

出典：大学図書館の整備について（審議のまとめ）－変革する大学にあって求められる大学図書館像－. 2010年12月.

具体例—当館の状況

■ 信州大学附属図書館医学部図書館

- 1977年3月竣工
 - 図書 168,272冊
雑誌 5,092タイトル
 - 職員 常勤4名、非常勤3名
 - 年間資料費 1980万円
 - 図書（研究室資料を除く） 450万円
 - 雑誌（冊子・電子） 1280万円
 - データベース 250万円
- 雑誌・データベースは医学部独自の分のみ



当館の状況（施設）

■ 面積（書庫含む） 1,806m²

■ 分散配置

図書館内	1,352m ²	9万冊
（うち閲覧室・グループ学習室	168m ² ）	
（うちバックナンバー庫（3層）	292m ² ）	
基礎棟地下書庫（3室）	273m ²	7万冊
保健学科 南校舎書庫	43m ²	5千冊
閲覧室（～2015.3閉室中）	138m ²	

青...閲覧スペース

赤...書庫スペース

当館の状況（学部）

■ 教室からの返戻資料多数

□ 大学特有の「研究室資料」

- 図書館が調達を担当、経費は研究費等
- 図書館が資産上の管理責任
- 目録に掲載されるが、すぐに利用できない場合も

□ 図書館資料や電子ジャーナルとの重複が多い

□ 研究室の都合で図書館に返戻される

- 都合＝教授の退職、スペースが足りない等
- 「重複となる場合の廃棄など、処遇は図書館に一任」の条件を了承してもらっている
- 実際のところ、研究室で使わない＝利用者にも必要ない図書も多い.....

当館の状況（学部）

■ 学生用スペースの不足

- 国試対策のための学修スペースの絶対数
- 特に夜間利用可能な場所（図書館は24時間）

■ 耐震改修

- 2012年3月～2013年3月
医学部基礎棟保存庫が使用不可
 - 2014年7月～2015年3月
保健学科南校舎第2保存庫が使用不可
- ⇒ その間の資料の置き場が必要！

何を除却するのか

除却基準の明文化

■ 担当者の独断による廃棄 ×

□ 船橋市西図書館事件（最判平成17・7・14）

要旨：公立図書館の職員である公務員が、閲覧に供されている図書の廃棄について、著作者又は著作物に対する独断的な評価や個人的な好みによって不公正な取扱いをすることは、当該図書の著作者の人格的利益を侵害するものとして国家賠償法上違法となる。

■ 公的財産の廃棄に関する説明責任

明文化した基準が必要！

明文化の事例

- 学校図書館図書廃棄基準
（1993.1.15 全国学校図書館協議会）
 - 一般基準 利用価値喪失、複本など4項目
 - 種別基準 百科事典、伝記、地図帳など18項目
 - 廃棄しない図書 年鑑、郷土資料など
- 公共図書館・大学図書館では、館により状況はさまざま

信州大学の基準 (1)

- 図書館資料の除却及び処分に関する要領
(2004.5.20)
 - 「保存の必要がないと認められる複本」など、
7つの判定基準の1つに該当すれば除却できる
※ 「除却しなければならない」ではない
 - 所管の図書館委員会において判定、図書館長の
決裁を経て除却
(図書館長・図書館委員はいずれも教員)

信州大学の基準 (2)

- 「——要領」申し合わせ (2004.5.20)
 - 各判定基準を判断するための指標を示す
 - 利用状況
 - 学内・外の所蔵状況
 - 改版出版物の有無・価格等
 - 同等資料の購入可否
 - 補修に要する費用

要領の運用

- 各指標がどのくらいの水準になれば「保存の必要がないと認められる」のか？
- 分野によって資料の耐用年数は異なる
⇒ 一律でなく学部図書館ごとに定める？

（例）医学分野は寿命が短い傾向
⇒ 「時日の経過により利用価値を失い...」
に該当すると思われる資料が多い

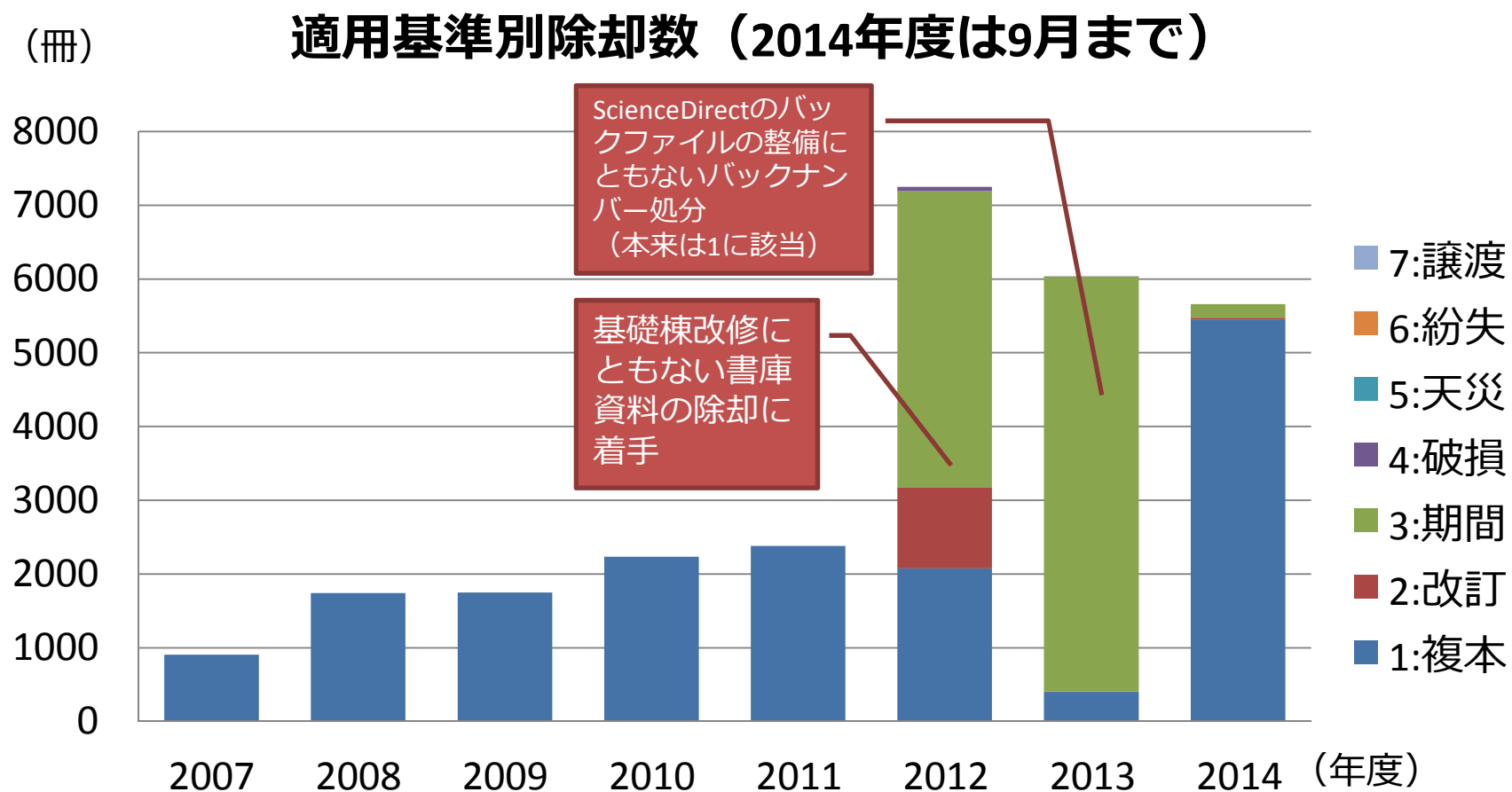
運用の具体化

附属図書館に除却基準検討チームを設置し、具体的な運用方法を検討（2013年度～）

2	図書の内容が逐次改訂され、または改版等により利用価値を失い、かつ、保存の必要が認められない図書	<p><全館共通基準> 利用実績の確認により除却候補とできる。 ただし、館により学内外の所蔵状況等の判断項目を設けてよい。</p> <p>※除却しようとする資料が除却候補理由 1 に該当する場合は、それにより除却するものとする</p>	①かつ②であるとき要件を満たす。		
			①利用実績の確認 ※全ての項目に該当する	利用状況の把握が可能なもの	過去○年に貸出・出納がない。
					過去○年にILLなど外部からの利用がない。
					その他（あれば具体的に定める）
			②学内・外の所蔵状況の確認 ※いずれかの項目に該当する	利用状況の把握が不可能なもの（禁帯出資料など）	②により判断
					関係教員・委員会等への照会を行い不用となった。（この項目を入れるかは任意）
					その他（あれば具体的に定める）
			○必須項目 ・学内だけでなく学外の所蔵状況の確認方法も明記	○任意項目 ・資料の種類・分野により項目を分けるかどうか、またその分け方	自館に新版を所蔵している
					学内他館に新版を所蔵している
					該当資料と同一版を、ILL加盟館が○館以上所蔵している
					該当資料と同一版を、国立国会図書館が所蔵している
					ただし、以下に該当する資料は改訂・改版されても利用価値を失わないものとする
					（あれば具体的に定める）

検討の例

除却の実績



処理の実際

- ① 対象の特定、判定
- ② 除却予定リストを作成
- ③ 学内照会
- ④ 図書館運営委員会での審議
- ⑤ 学外照会（国大図協、書店）
- ⑥ 現物処理（消印、装備解除等）
- ⑦ データ修正（図書原簿データベース、
NACSIS-CAT、ローカル目録）

対象資料の選別・判定・リスト化

- 1件ごとと内容や状態のチェック
重複や改版などの明確な指標でない場合、専門性の高い資料の判断は難しい
- 未遡及資料（除却検討対象には多い）の場合、書誌を同定しながら所蔵チェックとなるため、かかる労力が大きい
- 図書原簿データベースより、備品番号をもとにデータを抽出して作成

除却する資料の代替・補完

代替・補完

- 蔵書の単純減少を避け、除却前と同等かそれ以上のサービスを提供する
- 手段
 - ILL
 - 電子媒体への移行
 - 共同保存／シェアード・プリント

ILL

- 大学紀要等は発行元への依頼を前提に廃棄
- ILL件数減少、特に洋雑誌の複写が顕著
- 学術雑誌の電子化が学術情報へのアクセス環境を改善したが、予算確保、未電子化文献への対応といった課題も

出典：小山憲司. 学術雑誌の電子化とそれに伴う変化：NACSIS-ILLログデータ（1994-2007）を用いた文献複写需給の分析を中心に. 情報管理. 2010, Vol. 53, No. 2, p.102-112

- 電子ジャーナル離脱大学が増えることで状況に変化も？

電子媒体への移行(1)

■ 電子ジャーナル購読

□ 契約内容の確認

- 購読をやめてもアクセスできるかどうか
- Walk in userやILLの利用可否

□ 検索手段からの動線の整備

- ブラウジングが困難
- OPAC、リンクリゾルバ、ディスカバリー

□ 価格が毎年上がる

■ バックファイル

□ 買い切り。維持費がかかる場合もある。

本学の電子ジャーナル

■購読状況（全学）

- 電子ジャーナル 12,606タイトル
- 外国雑誌（冊子） 243タイトル

■バックファイル

- ScienceDirect 初号～1994年
- SpringerLink 初号～1999年
- Wiley Online Library 数タイトルのみ
- Science 初号～1996年

電子媒体への移行(2)

■ 電子ブック

- 図書館向けの日本語コンテンツやプラットフォームが発展途上
- 紙媒体に比べて高価

■ インターネットで閲覧可能な資料

- 永続性に関する確認は慎重に

■ 紙媒体からの電子化

- 著作権処理等、館単位では難しい部分が多い

共同保存

■ 北米の共同書庫

- 村西明日香. 北米における冊子体資料の共同管理の動向/ カレントアウェアネス. 2014, (319), CA1819, p. 26-31. <http://current.ndl.go.jp/ca1819>

■ 国立大学図書館協議会の保存図書館構想

- 保存図書館に関する調査研究報告書(1994.3)
http://www.janul.jp/j/publications/reports/44/44_0.html
- 学術情報資源への安定した共同アクセスを実現するために－分担収集と資料保存施設－(2001.6)
<http://www.janul.jp/j/publications/reports/72/index.html>

■ N P O 法人共同保存図書館・多摩

- <http://www.tamadepo.org/>

シェアード・プリント

“図書館が所蔵する冊子体（紙媒体）の図書や雑誌を、複数の図書館が共同で保存・管理すること。方法としては、各図書館がそれぞれ担当する資料を決め、それを各図書館で責任をもって保存する「分散型」と、各図書館が共同で使える書庫を用意し、対象となる資料をその書庫へ移送して保存する「集中型」がある”

出典：科学技術・学術審議会 学術分科会 学術情報委員会. 学修環境充実のための学術情報基盤の整備について（審議まとめ）. 2013年8月. p.11.

“お茶の水女子大学、千葉大学、横浜国立大学の三学長が図書館連携の申合せ：わが国初めての共同分散保存（シェアード・プリント）に着手”

<http://www.ocha.ac.jp/news/h260404.html>

シェアード・プリントの意義

- 重複の抑制を、複数館が共同で行うことにより、さらに効率化
- コストの分散
- 利用可能な資料の拡大
- 各図書館での空間の有効活用

導入前の留意点

- ① コレクションの共同保存・利用の考え方の理解
- ② 資料の消失を防ぐ危機管理の原則に立脚した保存資料の選択
- ③ 費用負担
- ④ 所有権の移管
- ⑤ 図書館コンソーシアムの新たな事業

出典：国立大学図書館協会学術情報委員会 学術情報の利用促進と保存プロジェクトチーム報告. 2014年3月. p.10.

除却にあたっての課題

当館の除却に関する課題(1)

- 開架の古い本⇒書庫送り
書庫の古い本⇒除却 という流れを、
ルーチンワークに組み込みたい
 - 現状は研究室返戻資料で手いっぱい
 - 開架に新たに購入する予算も少ない
- 除却対象に関する資料知識・主題知識
 - 選書にも共通する問題
「選書ツール」がない分、別の難しさがある

当館の除却に関する課題(2)

■ 除却に対する意識

- 「残す」意識（大学図書館に特に強い？）
- 残すべき資料と廃棄してよい（廃棄すべき）
資料との峻別を日ごろから
⇒ 選書基準・除却基準の実質化が重要

みなさまの館では いかがでしょうか？

ご清聴ありがとうございました

iwaima@shinshu-u.ac.jp